

# いすずめの里だより

第二十五号  
朝・昼・夜と別の顔 さて夕方の顔は？

夏休みの宿題で、朝顔の観察をした方は多いのではないのでしょうか。かくいう私も小学一年生の時に、毎日何色の花が何個咲いたかをチェックしていた一人です。

まだ涼しい早朝に、青や紫、ピンク色の花を咲かせ、日が高くなるとしぼんでしまう朝顔。花びらが薄くて繊細ということもありますが、なんとなくはかなげな印象があります。侘び寂、はかなさ大好きな日本人はもちろん朝顔も大好きで、江戸時代には多くの種類が作出され、今でもたくさんの朝顔が並ぶ朝顔市などは、夏の風物詩となっています。

強い日差しの中、道端で元気に咲く花に昼顔があります。花は淡いピンク色のみで、朝顔が種で増えるのに対し、昼顔はほとんど種子をつけずに地下茎で増えます。この地下茎が厄介で、取っても取っても取り残したわずかな地下茎からまた増殖していくので、増えて困る雑草のひとつです。

そういうえば子供の頃に昼顔を摘むと雨が降るよと言われたことがあります。昼顔の別名に雨降り花というものもあるので、各地でも言い伝えられている迷信なのでしょう。雨の恋しい季節、荒れ地に生き生きと咲く昼顔を、水をたたえた雨の使者に見立てたものなのではないでしょうか。

そして夜のときは下りると、あたりに甘い芳香を漂わせながら、闇を照らすような白い夜顔が咲き始めます。夏の日中はできることなら炎天下にはさらされたくないですが、夜になれば少しは気温が下がってきますので、外に出て夜顔を眺めながら夕涼みでもしたら心地よいことでしょう。

ところで夕顔じゃなくて夜顔なの？と思う方もいるかもしれませんが、本来夕顔とはかんぴょうを収穫する植物のことです。朝顔、昼顔、夜顔はヒルガオ科ですが、夕顔はウリ科です。そして朝顔の種とは全く違う、ウリ科独特の実がなりますので、それを薄く帯状に削って干したものがかんぴょうとなります。源氏物語に夕顔と呼ばれる女性が出てきますが、弱々しくはかなげな夕顔の花のなれの果てがかんぴょうだと知っていたら、別の呼び名をつけていたことでしょうね。

朝顔の種は漢方に用いられ「牽牛子(けんじょう)」と呼ばれることから牽牛(彦星)にかけて七夕前後に朝顔市が開催されることが多いです。

東京入谷で行なわれる朝顔市が特に有名。

花が終わったら葉っぱをむいてまあるい輪っかに整えておきましょう。よく乾燥させて好みの飾りつけしたらリースのごまあがり。夏は花を楽しみ秋にはクマフツも楽しめて一石二鳥ですね！

リースの完成!

朝顔は一般的には行灯仕立てが楽しめますが切り込み仕立てという盆栽風の粋な仕立て方もあります。最近では夏の白差しを味わうグリーンカーテンも人気。